



Title	『薄明の賭け』 : シュニッツラーの運命観について
Author(s)	宮本, 春美
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1996, 30, p. 65-76
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47824">https://hdl.handle.net/11094/47824</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『薄明の賭け』

——シュニッツラーの運命観について——

宮本春美

シュニッツラー (Arthur Schnitzler) の死後出版された自伝『ウィーン  
の青春』*Jugend in Wien* (1968) の後書きの中でトーアベルク (Friedrich  
Torberg) は、ライムント、グリルパルツァーと続くオーストリア  
文学の伝統の中に存在する *Spiel* という概念を用いてシュニッツラーの  
作品世界の特質を捉えようとしている<sup>1)</sup>。そしてそこでは特に、「死」  
(*Tod*)、「懐疑」(*Skepsis*) の問題との関係において考察が進められてい  
るのだが、それは世紀転換期のウィーンで、根本的な治療よりも病気の進  
行の診断を重視する「治療ニヒリズム」<sup>2)</sup> の影響下に医師として活動した  
彼の側面も考慮されてのことである。多義的な *Spiel* という言葉をめぐ  
って、まず私たちはシュニッツラーの出世作『アナートル』*Anatol* (1893)  
のホーフマンスタール (Hugo von Hofmannsthal) の手になるあまり  
にも有名な序詞の一節、「さあそれではお芝居を始めましょう 私たち自  
身のお芝居を演じましょう 早熟で繊細で哀しみにあふれたお芝居を 私  
たちの魂の喜劇を (Also spielen wir Theater, Spielen unsre eignen  
Stücke, Frühgereift und zart und traurig, Die Komödie unsrer  
Seele, [...])<sup>3)</sup> を思い浮かべることができるだろう。またシュニッツラ  
ーの作品だけではなくオーストリアの印象主義文学の精神を体現するもの  
としてしばしば引用される歴史劇『パラツェルズ』*Paracelsus* (1899)  
の台詞では *Spiel* に「芝居」と「戯れ」の意味が重ねられていることに

も思っていた。「この世で私たちがおこなうこと　どんなに偉大で深遠に見えようと　それはすべて戯れなのだ。[……] 夢と現実　真実と嘘　確かなものなど何もない　他人のことも自分のこともわからない　私たちはいつもお芝居をしている　それを知っている者こそ賢明なのだ。(Was ist nicht Spiel, das wir auf Erden treiben, [...] Es fließen ineinander Traum und Wachen, Wahrheit und Lüge. Sicherheit ist nirgends. Wir wissen nichts von andern, nichts von uns ; Wir spielen immer, wer es weiß, ist klug.)<sup>4)</sup> さらに Spiel が「賭博」の意味において作品構成上の転換点となり、主人公の運命を大きく狂わせるモチーフである場合がシュニッツラーには多い。たとえば創作活動のごく初期の『富』*Reichtum* (1891) は賭博をきっかけとする親子二代にわたる破滅の物語であるし、円熟期の傑作『カザノヴァの帰郷』*Casanovas Heimfahrt* (1918) の主人公カザノヴァは、賭博の場面を頂点として転落の一途をたどっていくことになる。Spiel という言葉の持つ語彙レベルでの重層性が作品の構成、テーマにまでことさらに深く及んでいるのが本稿で扱う『薄明の賭け』*Spiel im Morgengrauen* (1927) である。ここでも Spiel は一つの意味だけを提示しているのではないのだが、作品の分析を通してその点を明らかにしながら、Spiel と密接にかかわる「運命」(Schicksal) の問題に対するシュニッツラーの態度について考察してみたい。

## 1

『薄明の賭け』の主人公カスダ (Wilhelm Kasda) はシュニッツラーの作品の登場人物としてはひとつの典型であり、彼の文学世界に対するクリシェ Liebe, Spiel und Tod を具現する身分、帝国少尉 (Leutnant) である。カスダをめぐる三日の間に展開する物語は、元同僚ボーグナー (Bogner) の訪問をその端緒とする。ボーグナーは中尉であったが賭博が

原因で退役を余儀なくされ、ある会社の出納係となっている。今彼は千グルデンの使い込みの発覚を恐れカスダに用立ててくれるよう頼みにきたのであるが、ボグナーが置かれた情況はしかし、これからカスダに起こる事件の先取りでもあることがわかってくる。物語は大きく二つの部分に分けることができ、各部分に重要な人物が一人ずつ配されカスダはそれぞれに Spiel の局面を迎えるのである。それは前半部では「賭博」であり、後半部では愛の「戯れ」である。カスダは自分の百グルデンほどの所持金を元手にカフェで行われているカード賭博で友人の窮地を救おうとするが、逆に一万一千グルデンの負債をかかえることになり、友人の運命を託された彼自身がより深刻な運命の渦に身を投げ出すことになるのである。賭博の借金の直接の相手は自称エクアドル領事であり株式取引にも手を染めているシュナベール (Schnabel) で、カスダは彼から期限(二日後火曜の正午)までに返却しないときには軍司令部に提訴すると脅しを受ける。この窮境を脱するためにカスダは伯父に借金を願い出るが拒否され、つぎにその伯父がひそかに入籍していた若い妻に借財を懇願する。しかし彼女は昔カスダが一夜の関係を持った花売り娘レオポルディーネ (Leopoldine) であった。彼女との顛末が作品の後半部の中心をなす Liebesspiel である。カスダはレオポルディーネと二度目の夜を過ごすか、明け方彼女は立ち去る際に冷たく千グルデンのみを投げ与えるのだった。それは、数年前の一夜十グルデンを与えて彼女を商品のように扱い、花売り娘の気持ちを踏みにじったカスダに対する彼女の復讐だった。カスダは自分が体と引き換えに金銭を得ようとしていたことを悟り、ついに自ら命を絶つたのだった。

以上のようなおおよその筋立てからだけでも、いかに Spiel がこの作品を成立させる基本論理であるかが理解できよう。タイトルの Spiel はまず、カスダとボグナーの関係を示すものであり、その関係がカスダと

シュナーベル、カスダとレオポルディーネとの間の *Spiel* を引き起こしていくのである。また語りの視点に注目した場合、客観的な報告を基調として主人公の体験話法が混入するという形になっており、シュナーベル、レオポルディーネの内面は明らかにはならず、それぞれの *Spiel* のクライマックスに対する読み手の態度を一つに固定することを不可能にしている。このように語りの技法にまで介入しながら作品を重層的に規定している *Spiel* という原理のもとに、はたして私たちはこの物語をどのように読み解くことができるだろうか。

「エロスとタナトスこそシュニッツラーを捉えて離さない中心観念であった。それはこの作家がものを見るときの眼の中心であった」<sup>5)</sup> との言葉どおり、世紀転換期のウィーンにおいてシュニッツラーはフロイトの精神的「双生児」として、理性では制御しきれない個人の根源的な衝動、人間の心理の深淵を文学の世界で表現していった。シュニッツラーと時の心理学との分かち難い関係を表すものとして引かれることが多い、悲喜劇『広い国』*Das weite Land* (1911) の「人間の心とは広い国なのですよ」なる台詞がある。それは人の心が、夢や幻想などの中間領域、不確定な自我、根源的な性的衝動などにまでおよぶ果てしない広がりと深さを持つものであることを言っている。しかしさらには、心という「広い国」が、個に対する分析、批判を通して社会と世界がその姿を現す場所でもあることを示している。エーゴン・シュヴァルツ (Egon Schwarz) は、シュニッツラーの特に後期の物語作品について述べる時、彼を狭い意味での心理学の作家に限局することをよしとせず、次のように指摘する。「シュニッツラーは人の心を、普遍が個別に、すなわち社会的なものが個人的なものに転換する錯綜体として理解した。それゆえ個別の心理の分析は彼の場合常に社会的な深みをたたえている。」<sup>6)</sup>

『薄明の賭け』を多様な *Spiel* のあり方を軸として眺めた場合、まず

浮かび上がってくるのは明らかに、自己の同一性を保持できない、いわゆる「印象主義的人間」の崩壊の姿である。しかしそこには上のシュバルツの指示のように世紀転換期のウィーンの社会、階層構造、特に軍の名誉規範（Ehrenkodex）と経済に価値基準を置く市民社会の対立が如実に反映していると言える。この点を念頭に置いて、以下にカスダとシュナーベル、カスダとレオポルディーネの対立の図式にさらに詳しい検討を加えてみる。

## 2

カスダは帝国少尉として設定されているが、それが華麗な軍服をもってフランス・ヨーゼフ皇帝と並び二重帝国の永遠性の象徴であった竜騎兵（Dragoner）<sup>7)</sup>でないことには注意を要する。彼は物語の発端においてすでに軍人であった父を亡くして経済的に窮迫した、鬱屈した心情を抱く歩兵少尉（Infanterie）なのである。

カフェ通いが切り詰められた。服の新調も控えられ、煙草も節約された。もちろん女性にお金をかけることなど思いもよらなかった。幸先よく始まった三か月前のちょっとしたアヴァンチュールも失敗に終わった。文字通りヴィリーに、ある一夜二人のための食事代を支払う余裕がなかったからだ。（138）

このようなカスダが置かれた情況は服装の描写におけるシュナーベルとの対比を通してより際立ったものとなっている。

残念ながらもう十分に輝いて見えるとは言えない軍服を身につけ、膝のところが少してかり始めたラシャのズボンをはき、そして本来そうあるべきはずの将校の最新のモードからすれば、かなりみすぼらしい帽子をかぶって [……]（138）

ボーイが領事にケープを着せかけた。それは黒色でゆったりとしていて袖がなく、ビロードの襟が取り付けられたものだった。ヴィリーはすでに前からそのケープがエレガントだけれども、どこか異国風であるという印象を抱いていた。(158)

カスダは賭博が白熱していくにつれてボーグナーのためという名分を追いやり、上の記述に対応するように、「新しい軍服、新しいサーベルの緒、新しいシャツ、エナメル靴、煙草、二人での食事」(152)への欲望を勝負の動機として自覚していく。軍服への執着は、体裁、名誉へのこだわりを第一とするカスダが属する階層そのもののあり方を表してもいる。そしてカスダはその階層の中での役割を演じることにのみ自己実現の可能性を見いだそうとしているのである。

そもそも物語の前半部の賭博の場面に登場するのはカスダとシュナーベルだけではない。しかし他の登場人物を今一度確認するならば、それはカスダとシュナーベルの対立を明確に浮かび上がらせる背景にすぎないことがわかる。まず三人の将校が配されているが、そのだれもがカスダの疎外感、劣等感を際立たせる設定となっている。ウィンマー (Wimmer) は階級ではカスダを凌ぐ中尉であり、連隊付き軍医のトゥーグート (Tugut) はシュナーベルから「二週間前の立て続けの勝負で三千グルデンを取り上げた」(136)男である。「故意に他の人間、たとえば純朴で経験のない若い娘の健康を危険にさらす、すなわち病気を移す」(164)少尉グライズィング (Greising) は、「この数か月ちょっとした恋の幸運にも恵まれない」(136)カスダにとっては恋の領域における勝者といえるだろう。この三人の他には、俳優のエルリーフ (Elrief)、劇場秘書ヴェイス (Weiß)、弁護士フレグマン (Flegmann)、資産家のケスナー (Kessner) 母娘などがおり、それは『輪舞』 *Reigen* (1900) において娼婦から女優、兵士、

伯爵と類型化されたさまざまな男女の組み合わせが当時のウィーンの社会の断面を浮かび上がらせたことを連想させる。そしてこのような類型化、抽象化が目を引き人物配置は、カスダとシュナーベルの対立を、先に触れたようにそれぞれの属する階層、その階層が依拠する原理の対立として読み取ることを可能にするのである。「勝負はしだいにカスダ少尉とシュナーベル領事の間の一騎打ちの様相を呈していった。」(151)

シュナーベルがカスダを賭博の世界に引き込もうとするメフィスト的とも言える態度もその動機をけって個人的なものだけに帰することはできない。彼はかつて「三年の兵役を勤めたけれども伍長以上にはけって進めなかった」(163)ので、名誉規範の律する世界とは対極のところ、すなわち金銭の支配する世界での勝利者としてカスダに相対するのである。そしてカスダとシュナーベルの間で行われる Spiel は、現実での挫折の代償を求める場であり、勝負は自己の存在を賭けたものとなっていくのである。

領事は落ち着いた様子でカードを配った。そのとき一同がまわりを取り囲んで立っていた。軍医だけが姿を消していた。いや、ヴィリーは、彼が怒りで激しく首を振り口の中で何かをぶつぶつ言っている様子にずっと前に気づいていた。彼はおそらく、カスダ少尉がここで自分の存在を賭けて勝負することを一緒に見ていられなかったのだろう。医師たる者がそんなか細い神経をしているなんて。そして再びカードが彼の前にあった。彼は賭けた。それがどれだけの額なのかははっきりとはわからなかった。一つかみの紙幣。それは運命との互角の戦いに挑む新たな方法だったのだ。(157)

## 3

物語の後半の Spiel の相手レオポルディーネの、花売り娘から夫の財産の一切を管理し運用する女性実業家へという経歴は、彼女がシュナーベルと同様に物質主義に拠って立つブルジョア層に属していることを端的に示している。そして彼女のカスダに対する行為は、数年前に男性から女性になされた恥辱への個人的な復讐以上の多様な次元を見せ、カスダの運命を左右するものとなるのである。

兵營のカスダの部屋に現れたレオポルディーネの描写は、先に指摘したような客観的語り手とカスダの心理の体験話法によるものであるので、その語りの手法とも相まって、第二の Spiel の中でレオポルディーネが抱いているであろう真意はシュナーベルの場合にも増して読み取ることが困難である。彼女は「私は自由な人間なの。そのことを私はずっとそしてなによりも願ってきたの。私はだれにも頼って生きていないわ。男の人のようにね。」(195)と決然と言い放つ一方でコケットリーを示し、彼女が一万一千グルデンを肩代わりしてくれることに対するカスダの期待を宙吊りにする。

[……] しかし彼女は突然つば広の帽子を頭にのせしっかりとすえた。そのときいきんぎんな笑いを浮かべながら、もうおいとまする時間ですわ、と言った。ヴィリーも笑いを浮かべた。しかし彼の口元に漂っていた笑いは心の動揺、ほとんど驚愕からきたものだった。彼女は彼からかったのだろうか。それとも彼女はただ彼の動揺、不安を見て楽しみ、結局最後にお金を持ってきたと告げるつもりだったのだろうか。あるいは彼女は彼が望んだ額を用立てることができなかったのを謝りにきただけなのか。そしてそのことを彼にいう適切な言葉が見つから

なかったのか。どちらにせよ彼女が本気で何かの意図を持っているかどうかは見きわめがたかった。(193)

このようなレオポルディーネの態度に翻弄されたまま、カスダは彼女と二度目の夜を過ごすのであるが、それに続く朝の経緯こそ、この作品のタイトル *Spiel im Morgengrauen* が第一義に表するものだと言える。

夜が明け始めるころ、カスダの望む一万一千グルデンに対して一千グルデンだけを投げ与え、「サディスティックとはいえないまでも嘲りの笑いを浮かべて」(197)立ち去り、彼を自殺に追い込んだレオポルディーネに、はたして *Spiel* の勝者としての側面のみを見てよいのだろうか。たしかに彼女の「その千グルデンはあなたに貸したものじゃないのよ。それはあなたのもの、昨日の夜の報酬なの。」(198)という言葉はカスダに決定的な打撃を与えた。しかし自殺にいたるまでの彼の心理の推移、特にカスダが数年前の自分とレオポルディーネとの一件に関する記憶の糸をたどっていき、その結果ある認識がもたらされる過程を追ってみると、この *Spiel* の持つ意味、そしてレオポルディーネの役割があきらかになってくるのである。

[……]そして今、彼女の目の奥に不思議な輝きがあるのを認めた。それはあの昔の夜の彼女の目の中にあった純真で優しい輝きと同じだった。[……]あの夜の記憶が彼の中で不思議なほどいきいきとよみがえっていくにつれて、レオポルディーネの目の純真で優しい輝きはしだいに消えていった。冷たく、暗く、よそよそしい目が彼の目を凝視していた。今またあの夜のイメージが色あせていくのと同時に、拒絶と憤怒が彼の中でわき起ってきた。[……]そして突然彼は知った。彼はずっと前から気づいていたのではなかったか。彼の方でも身体を売る気があったということに。しかも彼女だけにではなく、彼を救う

ことのできる額を差し出してくれる人ならだれにでも。[……]彼の心の奥底で、必死にあらがったにもかかわらず、今まで気づかずにいた、しかし逃れることのできない正義というものを感じ始めていた。それは彼がかかわったこのみじめな体験を越えて、彼の存在の最奥に響いてきた。(198ff.)

レオポルディーネは単に個人的な恨みを果たしたのではなく、また一方的にカスダのモラルの欠如を糾弾しただけでもなく、カスダに彼自身が自分の存在に眼を向け、そのあり方に裁きを下そうとする認識をもたらしたのである。またそれがカスダ個人を越えて、彼が属する階層に向けられたものでもあることは、この後に続く彼の自殺の中での、シュナーベルとの Spiel の場合と同様な、シンボリックな軍服の描写が示している。

カスダ少尉はまっすぐに襟を立てた軍服を着て、どっしりとした革の長椅子の窓に向いた方のすみにもたれていた。まぶたは半分閉じられ、頭はがっくりとうなだれていた。[……]こめかみから頬をつたって一条の暗赤色の血が流れていた。そしてそれは襟元へと消えていった。[……]軍医が最初に近寄った。だらりとした腕をつかみ上へあげ、またおろした。[……]トゥーグートは余計なことに、カスダの軍服のボタンをはずした。その下にはくしゃくしゃのシャツがだらしなく着られていた。(204)

## 4

物語はカスダの自殺後のもう一つの Spiel とも言える出来事で終わっている。レオポルディーネはカスダの部屋を立ち去った後、後に期限として告げられていた時間(朝八時)に自分の夫、すなわちカスダの伯父に要求どおりの金額を届けさせたのである。もしカスダがその金を受け取って

いたならば、ここにレオポルディーネの意図——カスダの絶対的破滅——は達せられたことになっただろう。しかしカスダの自ら命を絶つという行為は、それを許さなかったのである。

カスダの自殺は一面では、たとえば『エルゼ嬢』*Fräulein Else* (1924)におけるエルゼの自殺が、父親の横領の罪を償うため金銭で売られたことへの絶望からきたものであったのと同時に、個人では克服しきれない大きな力との葛藤からの逃避であったのと性格を同じにしていると言える。それはユスト (Gottfried Just) による『薄明の賭け』の解釈の中では、「絶対的力としての運命」<sup>8)</sup> という言葉のもとに、主人公の倫理的な決断の力を認める余地が与えられていないという方向に沿うものでもある。しかしレオポルディーネから受けた屈辱によってカスダにもたらされた内なる正義への認識、自殺によって結局彼女の意のままにはならなかったという物語の結末には、ライ (William H. Rey) がシュニッツラーの晩年の作品群の重要なメルクマールとした倫理性<sup>9)</sup> を読みとらざるをえないのである。またその倫理性と交差するところには、社会的な、あるいは制度上の抑圧にあらがう個人の自由な意志の可能性が暗示されてもいるのである。それは、運命による絶対的拘束という決定論の問題に対するシュニッツラーの基本的態度へとつながっていく。そして彼はアフォリズムの形でもこの問題に対する一つの回答を提示している。

自由な意志というものを拒絶するならば、私たちは、罪と罰、善と悪、意味と無意味という、あらゆる倫理上の概念を放棄することを強いられるだろう。それに代り、審美的あるいは倫理的価値への要求が感じられない、ただ因果関係だけを表現するような名称を見つけなければならなくなるだろう<sup>10)</sup>。

## テキスト

Arthur Schnitzler: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben. Das erzählerische Werk*, Bd. 6. Frankfurt a. M. 1979.

ここからの引用は、本文中の括弧内にページ数を示した。

## 注

- 1) Vgl. Arthur Schnitzler: *Jugend in Wien. Eine Autobiographie*. Hrsg. von Therese Nickl und Heinrich Schnitzler. Frankfurt a. M. 1981, S. 325.
- 2) W. M. ジョンストン『ウィーン精神・ハーブスブルク帝国の思想と社会 1848-1938』1 井上、岩切、林部訳（みすず書房1986）338-348頁参照。
- 3) Schnitzler: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben. Das dramatische Werk*, Bd. 1. Frankfurt a. M. 1977, S. 29.
- 4) Schnitzler: *Das dramatische Werk*, Bd. 2, S. 240.
- 5) ジョンストン 373頁。
- 6) Egon Schwarz: *Milieu oder Mythos? Wien in den Werken Arthur Schnitzlers*. In: *Literatur und Kritik* 163/164, 1982, S. 28.
- 7) 二重帝国における軍隊の意味機能については、平田達治『輪舞の都ウィーン——円型都市の歴史と文化』（人文書院1996）271-283頁参照。
- 8) Gottfried Just: *Ironie und Sentimentalität in den erzählenden Dichtungen Arthur Schnitzlers*. Berlin 1968, S. 100.
- 9) Vgl. William H. Rey: *Arthur Schnitzler. Die späte Prosa als Gipfel seines Schaffens*. Berlin 1968.
- 10) Schnitzler: *Aphorismen und Betrachtungen*. Hrsg. von Robert. O. Weiss. Frankfurt a. M. 1967, S. 30.

（大阪大学非常勤講師）